

開会挨拶



ライチョウシンポジウム開会

○司会 ご来場の皆様、本日はご多忙のところ、お越しいただきまして誠にありがとうございます。只今より、第19回ライチョウ会議ぎふ大会ライチョウシンポジウムを開会いたします。私は本日の司会を務めさせていただきます。皆様、どうぞよろしく願いいたします。

はじめに、ライチョウ会議大会長であります一般財団法人中村浩志国際鳥類研究所、中村浩志代表理事より、ご挨拶いたします。

○大会長 中村浩志（中村浩志国際鳥類研究所 代表理事）

皆さん、こんにちは。新型コロナウイルスの問題の中、今回、大勢の方に全国よりお集まりいただきまして、ありがとうございます。

今回の大会は、19回目の大会になります。第19回ライチョウ会議ぎふ大会実行委員会主催という形で、開催することができました。実行委員長を務められました岐阜大学の楠田先生を始め、実行委員の皆さんに、まず私から最初にお礼を申し上げたいと思います。

また、今回の大会は、岐阜県、岐阜大学、それから日本野鳥の会岐阜県支部、岐阜県獣医師会等、多くの団体と共催で開催することができました。更に、今回の大会は環境省を始め、中部森林管理局、長野県、富山県、新潟県、山梨県、静岡県等の多くの組織から後援いただき開催することができました。心よりお礼申し上げます。

このライチョウ会議大会は、2000年に発足しました。長野県にある大町市、その大町市の市立大町山岳博物館が50周年を迎えるにあたって、それまでのライチョウの飼育とか野外

調査、それらを総括して今後どうしていくかを、広い視点から捉えなおそうということになったことが、このライチョウ会議の発足のきっかけです。

日本のライチョウが絶滅したトキやコウノトリのようにならないように、民間の力を中心にライチョウのしっかりした研究、それに基づいた保護対策を確立していこうということで、20年以上前の2000年に発足しました。それ以来、第1回目と2回目の大会を大町で開催した後、ライチョウが生息する県を中心に大会を開催して、今回、19回目の大会を迎えることができました。

岐阜県での開催は、今回で3回目です。第5回の大会と第13回大会を岐阜県の高山市で開催しました。そして今回は、もっと多くの岐阜県民の方にライチョウを知っていただくということで、岐阜市内で開催することになりました。今日、私の講演の中でお話しますように、ライチョウというのは、日本の自然保護のシンボルかつ、日本文化のシンボルとも言える鳥です。この貴重な鳥を絶滅することがないように、多くの英知を結集して、守っていきたいと思います。今回の大会を機会に、多くの岐阜県民の皆様からライチョウの保護に対するご理解とご協力を得られることを期待しております。

どうぞ、よろしくお願いいたします。



中村浩志 大会長からの開会あいさつ

○司会 続きまして、本日のライチョウシンポジウムを担当いたします、岐阜県環境生活部長、西垣功朗が開催県を代表してご挨拶をさし上げます。

○開催県代表 西垣功朗（岐阜県環境生活部長）

改めまして、こんにちは。只今、紹介いただきました、岐阜県の環境生活部長、西垣でございます。

本日は、先ほど、中村先生のお話しにもありましたが、コロナ禍での、このライチョウシンポジウム開催ということで、入口での検温、手指の消毒、そしてまた、この会場は定員の7割という形でキャパシティを小さくして開催しております。そのような中で、このように県内はもとより、岐阜県だけではなく、各地から多くの方がお集まりいただきまして、感謝を申し上げたいと同時に、ようこそ岐阜県へ、と歓迎を申し上げたいと思っております。

また、先ほど、中村先生の方からご紹介がありましたが、2012年の第13回大会以来での岐阜県の開催ということでございますが、前は高山市ということで、今回は岐阜市で開催地を設定いたしました。開催にあたりまして、岐阜大学には会場のご提供、あるいは学生の皆さんのご支援で、格別なご協力をいただいております、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

さて、岐阜県は海拔0メートルの水郷地帯から、標高3000メートルを超える高山山岳地帯までありまして、古くから飛山濃水の地として、飛騨の山、美濃の水、というように、変化に富んだ地形を有しております。このように、豊かな自然環境、それが織りなす気候風土が多様な動植物を育むとともに、私たち県民の生活や生業を支えているということでございます。

本日のシンポジウムのテーマでありますライチョウは、昭和40年に県の鳥に指定されておりました、まさに岐阜県の豊かな自然環境を象徴する生物、ということでございます。他方、そんなライチョウでございますけれども、生息域が限られておりました、私も含めて県民の皆様でも実際に目に触れた経験があまり無いのではないかと、私自身も先ほどライチョウ展の剥製を見た、ということでございます。ましてや、ライチョウが今や絶滅の恐れがある希少種になっていることについてもご存知ない方が多いのではないかと思っております。

そこで、本日は中村先生を始め、様々な立場からご活動されている皆様からライチョウの生態、それから、未来を展望した保全についてお話しをいただくこととしております。まずは、ライチョウのことを知ること、そして、その後のリレートークを通じまして、保全に向けて考えていく契機となれば幸いです。

さらに、冒頭で触れましたように、本日のシンポジウムはこのようなコロナ禍での開催ということでございますが、新型コロナウイルスというのは、人間による野生生物の領域の攪乱とか、過度な干渉がもたらした人獣共通の感染症リスクではないか、といったことも言われております。精妙に保たれた生態系の循環の中でこそ、私たちの生存というのは可能なのではないかと、また、野生生物との付き合い方をもう一度、見つめ直していくという教訓を与えているのではないかと思っております。

本日はライチョウの保全ということに特化したテーマといたしておりますけれども、このシンポジウムを通じまして、その後景にある生物多様性の問題にも思いを至らし理解を深めていただくことを期待いたしまして、ご挨拶といたしたいと思います。本日は、どうぞよろしく願いいたします。